

第2版 序

平成28年「国民健康・栄養調査」によると、「糖尿病が強く疑われる者」は1,000万人、「糖尿病の可能性を否定できない者」も1,000万人、と推計されています。糖尿病は、早期の段階では自覚症状がないため、自分が糖尿病であることを知らない、糖尿病と言われても医療機関を受診しない、受診していたのに中断してしまう、といった人が多いことが問題になっています。

血液透析が必要となるような腎機能障害や、動脈硬化による心筋梗塞や脳梗塞など、重大な疾患が糖尿病を背景として発症しますが、その予防のためには患者さんやその家族に自覚を持ってもらい、健康管理や糖尿病の自己管理を適切に行い、治療を継続してもらうことが何よりも重要です。医療者にとっては、患者さんを治療する、ということに加え、患者さんをサポートする、ということがとても大事になってきます。

糖尿病であるかどうかは、健診を受けさえすれば簡単にわかります。一方で、内分泌疾患や代謝疾患、栄養疾患は、気づかれにくい病気といえるかもしれません。疾患ごとに症状が多岐にわたるため、患者さんの症状を総合的に判断して必要な問診や検査を行う医療者の「センス」が大事です。

糖尿病も、内分泌疾患も、ある特定の臓器の疾患ではなく、全身に影響が及ぶ疾患です。医療者にとって、疾患について正しい知識を持つことが大事なのは言うまでもありませんが、さらに加えて、病気を疑い、診断し、適切に治療して、長期にわたって患者さんをサポートするには、患者さんの心身の全体を見渡すことが大事です。本書では、臨床の第一線で日々診療にあたっている先生方が、最新の知識と、豊富な臨床経験に基づき、糖尿病や内分泌疾患、代謝疾患、栄養疾患について、実践的な解説をされています。医療者や学生のみなさんばかりでなく、患者さんやご家族にとっても有益なものとなると思います。

最後に、忙しい診療の傍ら本書執筆の労をお取りくださった先生方や、貴重な写真を提供してくださった先生方に深く感謝の意を表します。

2018年3月

監修・編集者を代表して
林 道夫

初版 序

飽食の時代と言われて久しい。しかし、その言葉に象徴されるような豊かな社会が実現した途端に、糖尿病や肥満などの生活習慣病が私たちにとって身近な病気となったのは皮肉なことである。

現在、糖尿病患者は200万人以上、その予備軍とよばれる人々は1,400万人にのぼると推計されており、依然として増加傾向にある。糖尿病は遺伝的素因に過食・運動不足・ストレスなどの生活習慣要因が加わって発症すると考えられるが、逆に、これらの要因を適切に管理すれば、ある程度は発症を抑制したり症状をコントロールすることも可能である。

言い換えると、医師・看護師・栄養士・薬剤師などの医療従事者が連携して治療や患者指導にあたって、患者が他人任せでは、決して治療効果の上まらない疾患なのである。

これは糖尿病だけでなく、本書で取り上げた脂質異常症（高脂血症）、メタボリックシンドローム、高尿酸血症、骨粗鬆症、ビタミン欠乏症・過剰症など、多くの代謝・栄養疾患に共通する特徴である。治療ならびに発症予防の鍵は、患者自身による食生活を中心とした継続的な生活習慣の改善にある。そのためには、患者に疾患と食事・栄養・運動との関係を十分に説明し、理解してもらう必要がある。

本書では数多くの図表・写真・イラストを用いて、これらの疾患についてできるだけわかりやすく解説することを心がけた。医療従事者や学生の皆さんはもとより、患者とその家族、また一般の方々にも十分読みこなせる内容となっていると思う。疾患についての理解を深め、治療や予防に役立てていただければ幸である。

2010年7月、日本糖尿病学会は糖尿病の診断基準を11年ぶりに改訂した。新基準ではHbA1cを診断項目の上位に据え、より早期の診断を促すとともに、診断と治療の一体性を高めることを目指している。本書の記載もこの新基準に準拠している。新しい診断基準が有効に活用され、糖尿病患者の早期発見や合併症の発症をくい止める有効な手立てとなることを期待したい。

最後に、忙しい診療の傍ら本書執筆の労をお取りくださった先生方や、貴重な写真を提供していただいた先生方に深く感謝の意を表する。

2010年8月

監修・編集者一同